様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５３０７５２
研究課題名（和文）　「使い捨てられる若者たち」に関する比較社会学

研究課題名（英文）　Comparative Sociology of youth at unstable work

研究代表者
山内乾史(YAMANOUCHI KENSHI)
神戸大学･大学教育推進機構・教授
研究者番号:２０２４００７０

研究成果の概要：
日本における「使い捨てられる若者たち」は英米等の他先進諸国と異なり、いわゆる社会的排除の対象とされやすい層からのみ輩出されているのではないのではないか、との仮説に基づき、日英米三国の比較研究を行い、一定の条件下、限定付きではあるが、仮説が成立することを確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学･教育社会学
キーワード：若年就労、キャリア教育、フリーター、ニート、職業意識

１．研究開始当初の背景

昨今、若年就労問題は深刻になる一方であるが、日本にこの問題の主たる論じられ方は、欧米同様に社会的排除という視点から、と考えられる。しかし、研究代表者を中心に、少なからぬ例外を観察してきたため、社会的排除以外の視点から若年就労問題を考察したいということが研究開始当初の背景であった。

２．研究の目的

上記の通り、英米と比較しながら、若年就労問題の日本的特質を明らかにすることが本研究の目的であるが、その際、①われわれが従来から取り組んできた学力問題との関

連において考察すること、②高学歴者であえて低賃金労働に従事するものが日本では少なからず見られるが、彼ら/彼女らは何を意図してどこを目指して、こういった職業に就くのかを明らかにすること、に力点を置いた。

３．研究の方法

本研究費を中心にしながら英米両国を訪問し、若者たちに対しインタビュー調査を行い、日本において行われたアンケート調査、インタビュー調査と比較する。また、オーストラリアの就労支援、職業教育について考察し、アングロ＝サクソン型の問題の在り方と、日本の問題の在り方を明らかにする。また、文献調査･レビューを集中的に行った。

４．研究成果

日本には伝統的に社会的排除の結果、就労において不利を託つ層がいる。この問題は全く英米の社会的排除をカギにした問題のとらえ方と重なるが、日本には低所得層やマイノリティではない層からも低賃金労働者が輩出しており、これは英米ではまれにしか見られない。これは若者たちの就労観、職業観の急激な変化を反映している。

また、研究代表者が行った大学院修了者の職業機会に関する研究では、まず、第一に大学院 vs と学部という構図ではなく、学士課程＋修士課程 vs 博士課程という構図で大学を捉えることである。修士課程は文系・理系ともに今後も引き続き拡大して行くであろうし、教授法・カリキュラムや管理・運営のあり方に関してもいわゆる学校化の傾向を強めて行くであろう。修士課程に進学してくる学生の中にはもちろん、博士課程への進学を意図する者もいる。しかし、少なからぬ者が学部教育では不十分であると感じて補完的な教育、完成教育を修士課程に期待している。当然ながら、博士課程にはそのような者は僅少である。大学院を五年一貫と捉えるのではなく、修士課程を学士課程とセットで考え、博士課程とは切り離すべきであろう。修士課程が学校化して、拡大するのに対して、博士課程は研究者（もちろん、大学教員とは限らない）養成機関として、修士課程よりももっと狭いミッションを背負った教育研究ユニットとして考える必要がある。研究者に対する需要は当然、限りがある。修士課程はこれまで通り自由主義的な規制緩和路線で進めばいいが、博士課程はもう少し厳しい規制を課していくべきではないか。促す方が重要なのではないだろうか。

また、それとは逆に、日本型「野郎ども」の登場を指摘しておきたい。ポール・ウィリス（1976）は『learning to labour』（放題「ハマータウンの野郎ども」）を表したが、日本版の「野郎ども」が登場しているのではないか、ということである。イギリスのハマータウンにいる野郎ども、つまり労働者階級の子どもたちと教育の関係はほとんど機能していなかった。真面目に勉強してましな仕事につくことは中産階級である「奴ら」にしたがうことだと考えているからである。したがって、彼らにとって勉強することは意味をもたず、労働者にとって必要な仲間や社会保障、労働組合など、つまり労働者階級がもっている文化と野郎どもは神話的な関係であった。それが階層上位の人間が持つ文化と対抗、つまりカウンターカルチャーをなしているというのがウィリスの指摘であった。いわば、ウィリスの指摘を借りれば、学校教育から落ちこぼれてしまった若者を甘んじて受

け入れる文化が当時のイギリスには存在していたということである。それでは、日本の場合はどうか、と考えたとき、日本では教育から落ちこぼれた「野郎ども」を受け入れるような労働者階級の文化はもともと存在していない。これはイギリスとの最大の違いであったのである。日本において、教育はすべての子どもたちを巻き込む営みであるため、そこから落ちこぼれる子どもを想定することがなかったからである。それにもかかわらず、学校教育になじめない、もしくはなじまない若者、学校文化に価値を見出せない若者、つまり日本型「野郎ども」は増加している。ここにウィリスと同じ構造が日本の若者の中にもでてきはじめたのではないか、と考えられるのである。ただし、「野郎ども」を受け入れるような文化は日本にもともと存在していないため、当然の結果として彼らは社会から問題視される、それがフリーターやニート、ワーキング・プアである若者たち、これが先ほど言ったフォビアの問題として語られているのではないだろうか。

一方で、「野郎ども」の文化がもともと存在していたイギリスでさえも変化が始まっている。イギリスでは 1970 年代より社会的排除、そして、ブレア登場以後社会的包摂という概念が始まった。そのために、労働者階級の文化そのものに揺らぎが生じているのである。サッチャー以後のイギリス教育改革はどの子どもたちも国がおこなう統一テストを逃れることはできない。イギリスの子どもたちは以前の日本のように子どもたちすべてを巻き込む教育へと変化している。今回の調査地であるハワイもイギリスと同様の傾向を見せていると考えられる。本来、ハワイ人の労働者階級の価値観であった「家庭を大切にする」「あくせく働かずにのんびり過ごす」といった価値観そのものが変化し始め、日本と同様の傾向を示し始めたのではないか。逆に日本はハワイ的、イギリス的なものへ変化し始めたのかもしれない。お互いのベクトルが逆方向に進み始めたのではないだろうか。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）

①山内乾史「若者にとってキャリアとは何か（その３）」『大学教育研究』第 17 号、59 頁～69 頁、2008 年、査読有

②山内乾史「若者にとってキャリアとは何か（その２）」『大学教育研究』第 16 号、81 頁～92 頁、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計５　件）

①原清治・山内乾史・山崎瞳「『使い捨てられる若者たち』に関する比較社会学（その３）」日本教育社会学会第60回大会、平成20年9月20日、上越教育大学

②米谷淳・山内乾史「教養教育に関する海外調査（その１）―オーストラリアの到達度目標型プログラムの研究」日本高等教育学会第10回大会、平成20年5月26日、名古屋大学

③米谷淳・山内乾史「教養教育に関する海外調査（その２）―オーストラリアの高等教育政策」日本高等教育学会第11回大会、平成20年5月20日、東北大学

④原清治・山内乾史「『使い捨てられる若者たち』に関する比較社会学（その２）」日本教育社会学会第59回大会、平成19年9月22日、茨城大学

⑤原清治・山内乾史「『使い捨てられる若者たち』に関する比較社会学」第22回アジア教育研究会、平成19年7月13日、

京都大学

〔図書〕（計４　件）
①山内乾史・原清治編『教育＝職業の比較社会学（仮）』学文社、2009年（近刊）
②原清治・山内乾史『「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か』ミネルヴァ書房、2009年
③山内乾史（研究代表者）『「使い捨てられる若者たち」に関する比較社会学（課題番号19530752）』（平成19年度～20年度科学研究費補助金基盤家研究(c)研究成果報告書）神戸大学・大学教育推進機構、2008年
④山内乾史編『教育から職業へのトランジション』東信堂、2008年

６．研究組織
(1)研究代表者
山内乾史(YAMANOUCHI KENSHI)
神戸大学・大学教育推進機構・教授
研究者番号:20240070

(2)研究分担者
米谷淳(MAIYA KIYOSHI)
神戸大学・大学教育推進機構・教授
研究者番号：70157121

原清治(HARA KIYOHARU)
佛教大学・教育学部・教授
研究者番号:20278469

(3)連携研究者
小川啓一(OGAWA KEIICHI)
神戸大学・大学院国際協力研究科・教授
研究者番号:90379496

深堀聡子(FUKAHORI SATOKO)
国立教育政策研究所・高等教育研究部・総括研究官
研究者番号：40361638

植田みどり(UEDA MIDORI)
国立教育政策研究所・教育政策・評価研究部・研究員
研究者番号:20380785